

海の道むなかた館長

第3回 不弥国

西谷 正

I はじめに

倭人伝に見える不弥国

II 不弥国の位置をめぐって

- (1) 嘉穂説
- (2) 宇美説



III 糟屋郡域の遺跡群

- (1) 稲作の始まり－粕屋町・江辻遺跡
- (2) 首長墓の登場－古賀市・馬渡東ヶ浦遺跡
- (3) 春日市付近に次ぐ青銅器生産－福岡市東区・多田羅遺跡 ほか
- (4) 終末期の墳丘墓－志免町・亀山墳丘墓 ほか

IV 糟屋郡域における初期前方後円墳

- (1) 福岡市・香住ヶ丘古墳
- (2) 宇美町・光正寺古墳

V おわりに



復元整備された光正寺古墳

3世紀の東アジア諸国と北部九州の国々



東
行至不彌國百里官曰多
模副曰卑奴母離有千餘
家

東行して不彌國に至るには百里。官を多模と
いい、副を卑奴母離という。千余家あり。



第19回国民文化祭前原市実行委員会ほか, 2004『シンポジウム 邪馬台国時代「伊都国」』

不弥国と倭人伝の国々



九州大学大学院教授 西谷 正

「魏志倭人伝」の冒頭には、つぎのようによく知られた一節がある（現代語訳は、今鷹真・小南一郎訳

『正史三国志4』ちくま学芸文庫による）。

倭人は、帯方郡の東南の大海の中におり、山がちな島の上にそれぞれ国邑こくゆうを定めている。もともと百余国があつて、漢の時代に中国へ朝見に来たものがあつた。現在、使者や通訳の往来のある国が三十国ある。

この記述や、北部九州における考古学の調査成果から見て、弥生時代中期後半のころ、北部九州を中心に百個所余りの地域社会があり、その多くが中国の漢帝国と外交関係を結んだ結果、国と認証されていたようである。その後、弥生時代終末期に当る魏王朝の時代になると、それらの中の三十国が外交交渉をもったことがうかがえる。

三十国の中には、邪馬台国を頂点として、倭すなわち日本列島の各地に、大小さまざまな国々があつた。そのうち、福岡平野にあつた奴国みには、倭人伝によると、二万余戸の人家があつた。その規模は、七万余戸の邪馬台国や五万余戸の投馬国について大きい国であつた。そして、奴国の近くには不弥国があつた。不弥国について、倭人伝はつぎのように記している。

（奴国）から東に進んで不弥国まで行くには百里。長官は多模たもと呼ばれ、副官は卑奴母離ひなと呼ばれ、千余戸の人家がある。

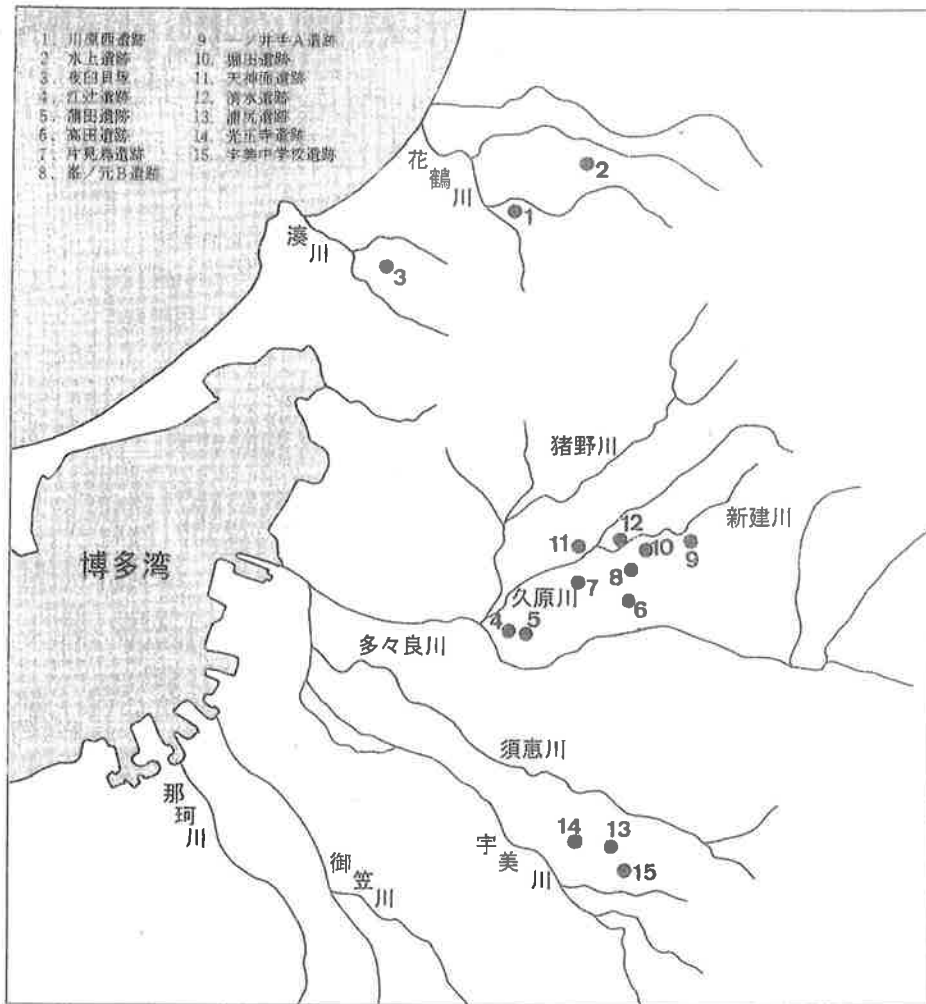
ここで、不弥国の所在地をめぐって、周知のとおり、諸説あるが、現在の宇美町付近もその一つの候補地であつた。おそらく、宇美が不弥に通じ

ることや、伊都国（前原市付近）と奴国までの間を百里とする距離観にもとづく地理的位置などが主要な論拠であろう。

さて、列島各地に国々を比定するとき、状況証拠としていくつかの条件がある。まず、当時の国の領域に関して、これまでしばしば指摘されてきたように、明治28年まで続いてき、現在もその名残りを一部にとどめる。地方行政単位としての郡ぐんが一つの目安になる。そのような郡は、律令制時代の郡こおりに始まるが、さらにさかのぼって古墳時代のころの縣あがたに由来する。ちなみに、奴国は、倭縣ながあがた（『日本書紀』仲哀紀8年）から、那珂郡（『延喜式』神名帳・『和名類聚抄』）、奈珂郡・仲郡（8世紀前半須恵器刻書銘）へと変遷している。このことから逆に類推して、宇美（『古事記』中巻一仲哀天皇の項）や宇瀨（『日本書紀』神功皇后摂政前紀一仲哀天皇9年12月の項）を含む糟屋郡域に一つの国を想定することは可能である。

つぎに、不弥国の時代つまり弥生時代後期の拠点集落や墳丘墓・居館などの遺跡や、後漢鏡などの顕著な遺構や遺物の発見が待たれる。この点に関連して、不弥国に続く大和政権もしくは古墳時代の初期の大形の前方後円墳である光正寺古墳の存在意義は大きい。このような古墳が突如として出現する背景には、光正寺古墳の築造基盤となる地域社会が前代に形成されていたことを意味するからである。そのような地域社会こそ不弥国ではなかったらうか。

宇美町・宇美町教育委員会，2000『シンポジウム 不弥国と倭人伝の国々』

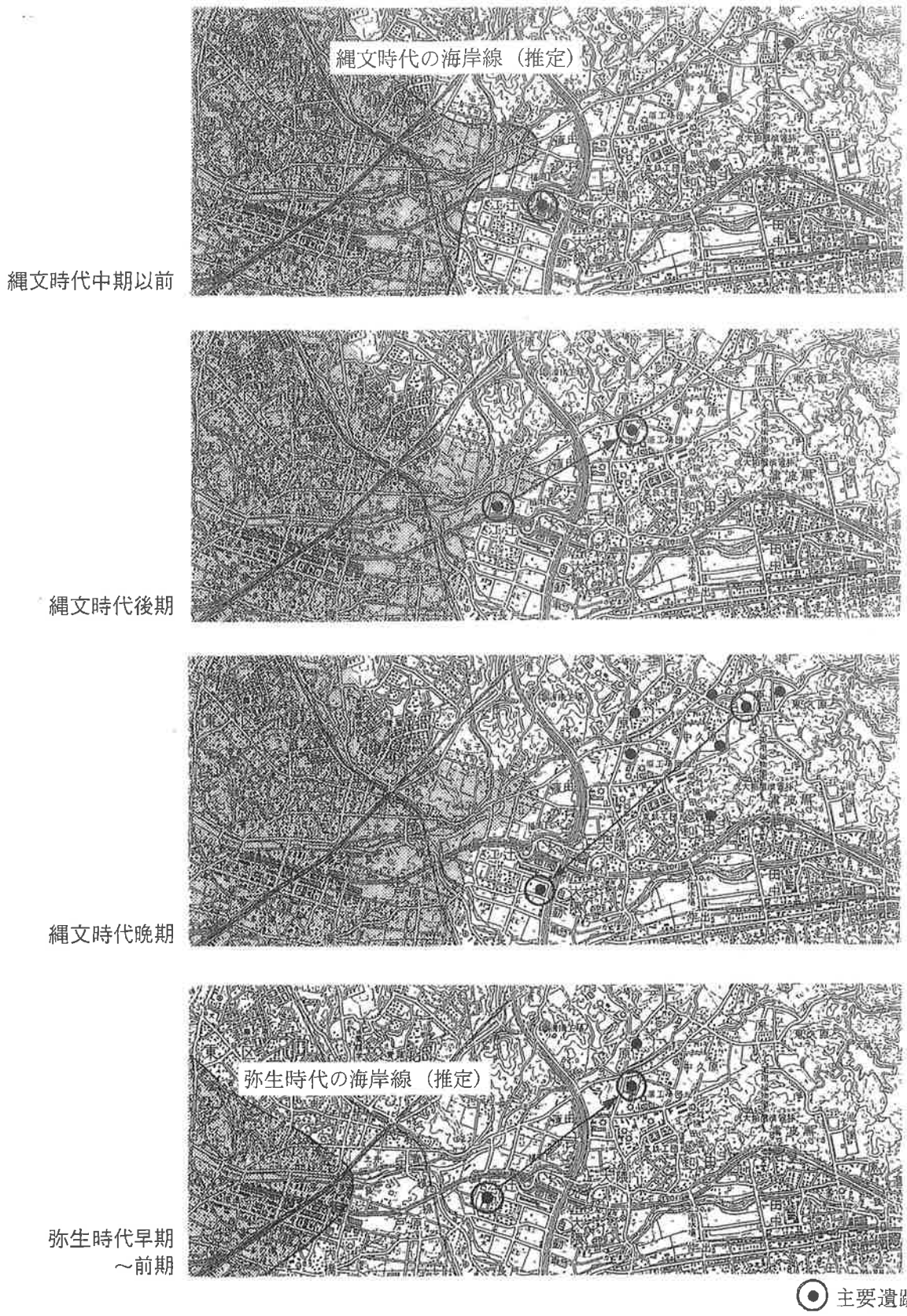


第1図 糟屋平野における縄文時代遺跡分布図

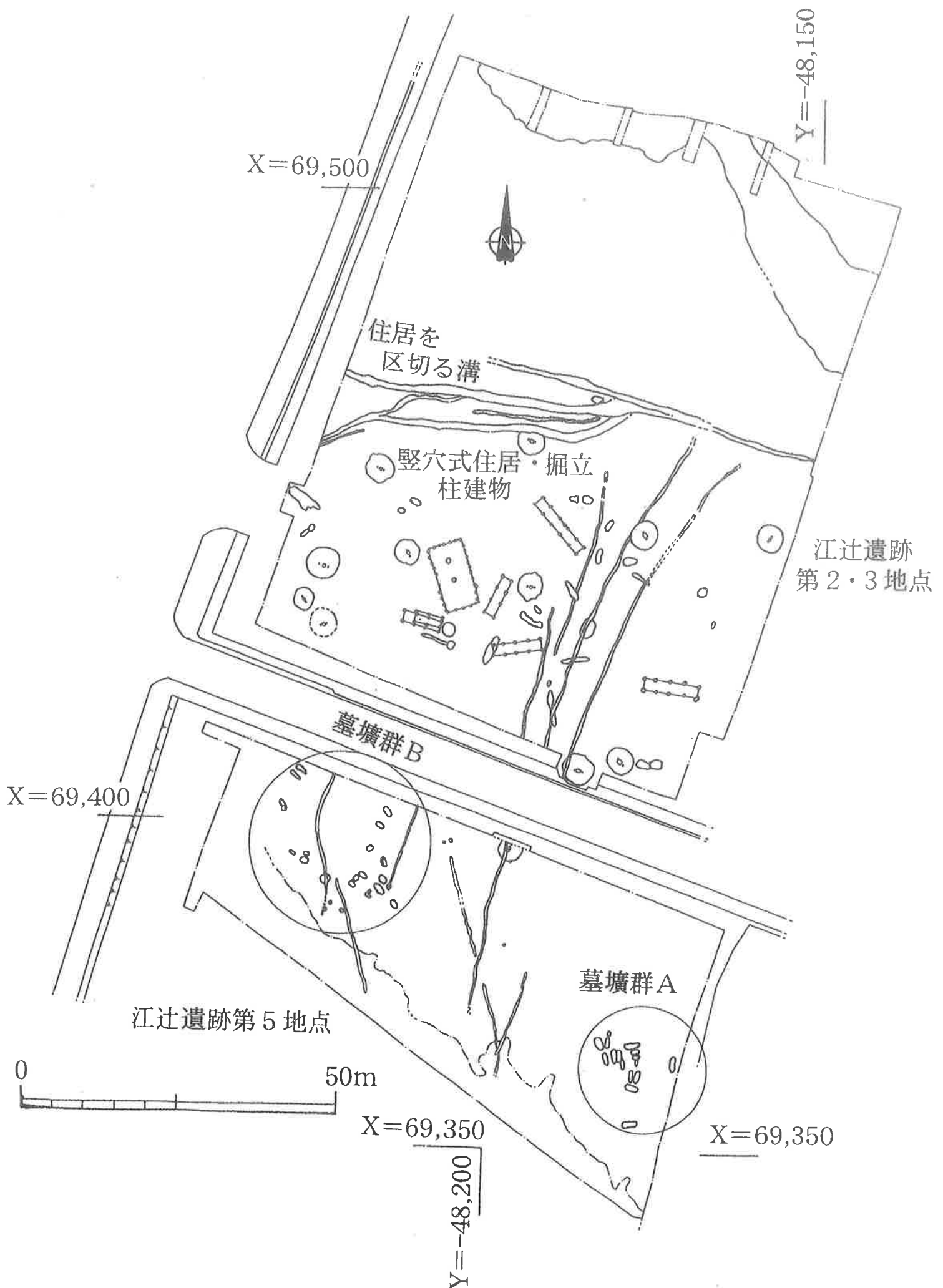
遺跡名	中期以前	後期前半	後期後半	晩期前半	晩期後半	弥生前期
川原西		←				
水上			→			
夜臼貝塚						↔
江辻			↔			↔
蒲田						
高田						
片見鳥			←	→		←
峯ノ元B					↔	
一ノ井手A					↔	
堀田				←	→	
天神面					↔	←
清水					↔	
宇美中学校						
浦尻						
光正寺						

第2図 縄文時代後・晩期の遺跡の消長

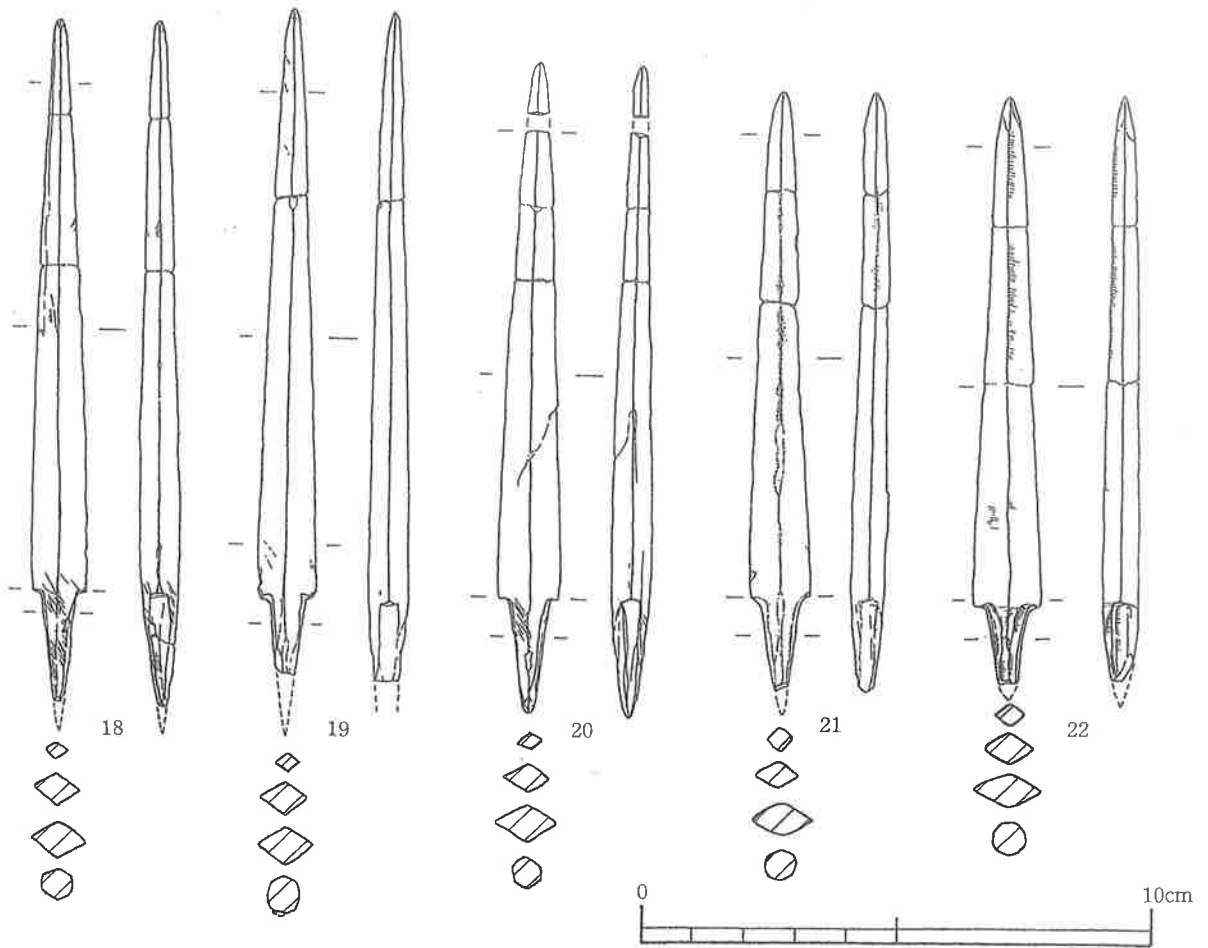
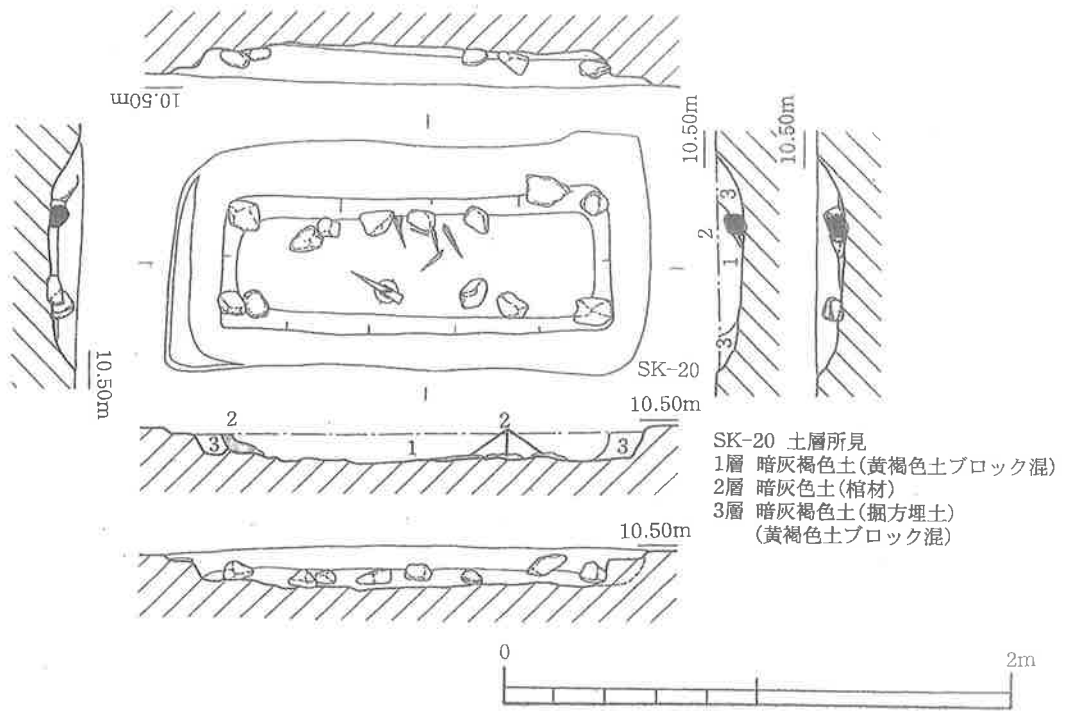
江上智恵, 2007「糟屋平野における縄文時代後・晩期集落の様相」『古文化談叢』第57集



第3図 多々良川流域における縄文時代～弥生時代前期の遺跡立地の変遷
 (『粕屋町誌』掲載図一部改変)

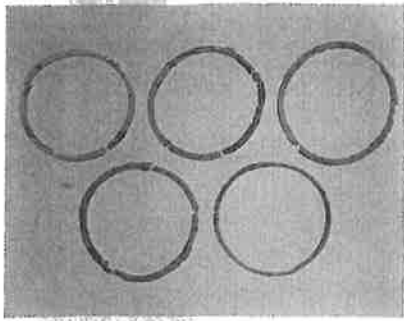


江辻遺跡第5地点と江辻遺跡第2・第3地点主要遺構配置図



第 20 号土坑実測図及び出土遺物実測図(1/30・2/3)

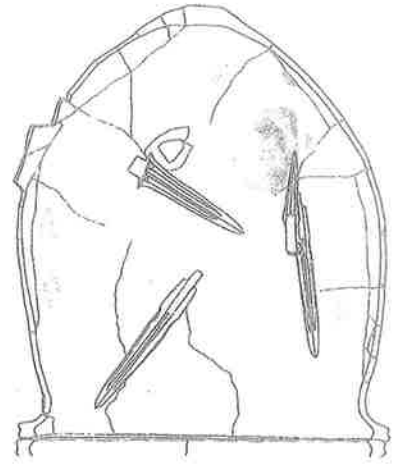
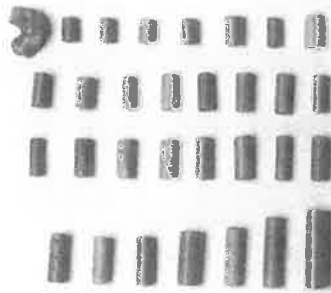
粕屋町教育委員会, 2002 『江辻遺跡第5地塊—弥生時代早・前期墓地群の調査—』
 『粕屋町文化財調査報告』第19集



3号甕棺墓出土品

上 銅劍(直径6.5cm)

右 碧玉製管玉(長さ4.8~15.2cm)



2号甕棺墓青銅器出土状況
(1/15)



鉄劍

(1号木棺墓 長さ35cm)



細形銅劍

(B地点 長さ34cm)



銅劍、銅戈、銅矛

(2号甕棺墓 長さ左から33cm、31.2cm、25.2cm、20.2cm)



【2号甕棺墓の副葬品】

副葬品が納められた墓は四基発見されているが、なかでも最も多くの副葬品が副葬されていたのが2号甕棺墓である。合口甕棺から二本の細形銅劍と細形銅矛、銅戈の各一本ずつが副葬されていた。銅支付近から歯骨が出土しており、赤色顔料も厚く降りかけられていたのでこのあたりが頭部の置かれた位置とみられる。

武器はいずれも細形で銅劍と銅戈には木柄を装着した痕跡が残っていた。またこれらの刃には、刃こぼれが顕著にみられ、金属器と打ち合った可能性が高いとされており、実用の武器としての使用が想定される。

しかし、井さんは、矛、戈など刺突による使用が主であるはずで、実戦での刃こぼれに疑問を投げかけ、これが実際の戦闘によるものではなく、模擬戦で金属どうしを内ち合わせて音を出すなど儀礼祭場の場で使用された可能性があることを指摘しており、青銅製の武器が儀器化していく過程を考える上で興味深い。B地点から、もう一本銅劍が出土しているが、こちらには明確な刃こぼれの痕跡は認められない。

【その他の副葬品】

3号甕棺墓からは銅劍五点が重ねて積みあげられた状態で出土しており、身体からはずして副葬されたものとみられる。また、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉など装身具のみが副葬されていたことから被葬者は女性だったのかもしれない。

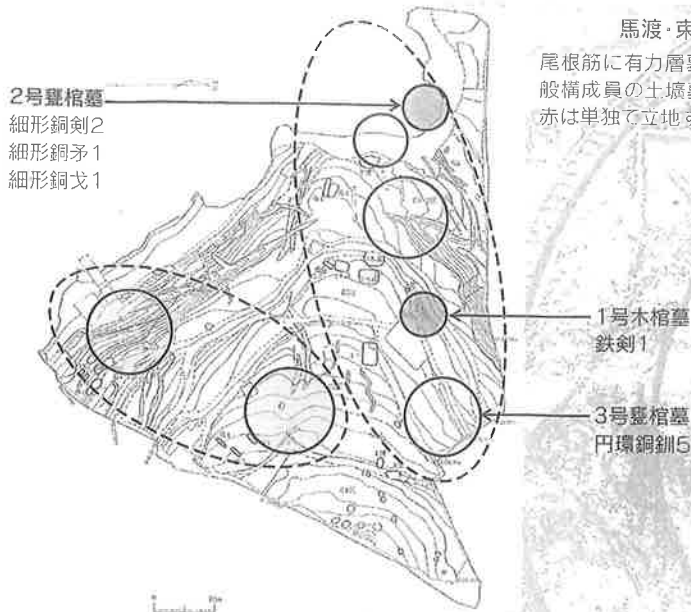
また、1号木棺墓からは鹿角の柄を着装したとみられる鉄劍が副葬されていた。2号甕棺墓に続く首長の墓とみられ、劍の材質が青銅から鉄へと変化したことがわかる。

雄者の象徴 銅劍

馬渡・束ヶ浦遺跡

馬渡・束ヶ浦遺跡の墓群の配置

尾根筋に有力層墓が立地し(橙)、斜面に一般構成員の土壙墓群(緑)が配されている。赤は単独で立地する最上層墓



2号甕棺墓の埋葬イメージ



2号甕棺墓の青銅器出土状況

粕屋地方の有力者層墓

粕屋地方の海岸部に位置する古賀市・新宮町一帯も弥生時代初期の段階から集落が形成された初期弥生文化受容地域のひとつで、夜白遺跡、鹿部東町遺跡などの、著名な遺跡が知られる。また、中期になると久保長崎遺跡・浜山遺跡・千鳥遺跡などで青銅器鑄型が出土するなど生産力の高い有力集落も存在する。

しかし、有力者層の台頭を具体的にうかがわせる墓の発見例としては、鹿部唐石宮で大石の下から出土した甕棺墓に銅劍、銅戈の副葬されていたのが知られている程度で、この地域の実態は長年不明のままの状態が続いていた。

馬渡・束ヶ浦遺跡の墓群の特徴

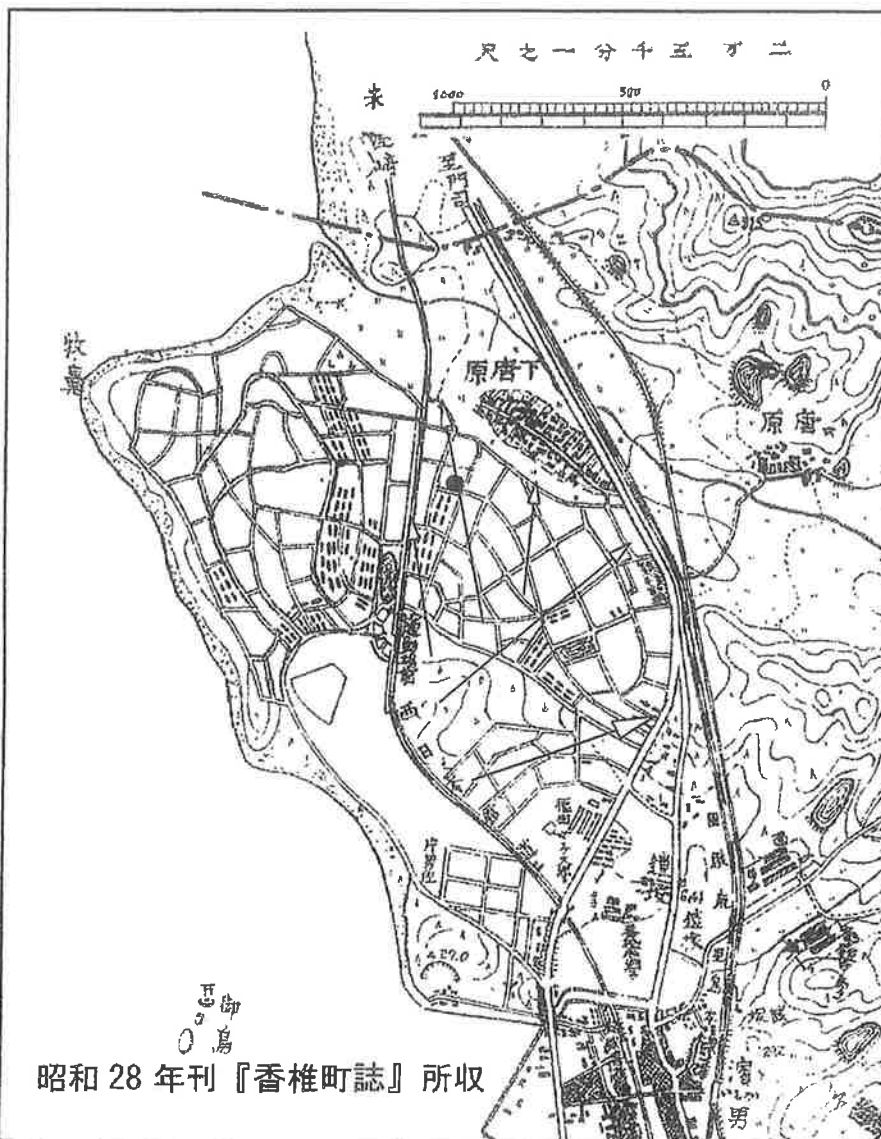
平成一三年、馬渡・束ヶ浦遺跡から新たに有力者層墓を含む弥生中期の墳墓群が発見されて注目されている。遺跡は、前述の遺跡群よりも内陸に移った丘陵地帯の一角にある。

遺跡からは総数二一基の埋葬施設が発見され、調査を担当した井英明さんは七群で構成されるとみている。このうち大規模な墓壙を有する甕棺墓、木棺墓、木蓋土壙墓が丘陵の尾根筋に立地し、さらに二号甕棺墓一号木棺墓は単独で立地していた。この二基の墓の中からは金属製の武器が副葬されていたことから、他の墓とは隔絶された上位階層の墓と考えられている。

これらの状況から、この遺跡の墓群では甕棺墓、木棺墓を最上位、続いて木蓋土壙墓、その下に土壙墓といった序列を読み取ることができ、これが墓群の配置にも反映された格好の資料といえる。



◀ 香住ヶ丘周辺 (昭和35年当時)



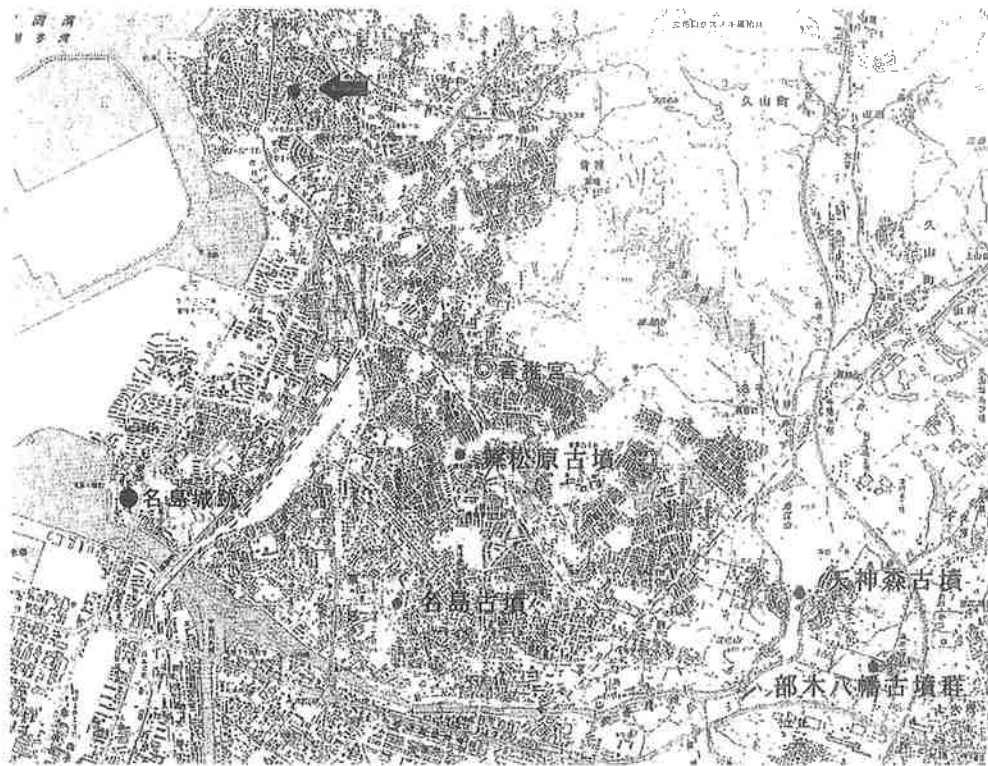
◀ 香住ヶ丘は、昭和31年町名変更により、浜男・唐原の各一部を合わせ、付近の字名であった霞ヶ丘と香山にちなんで名付けられた。昭和25年・37年に県営住宅が建設されたことから住宅地として発展している。

一带は、博多湾に面した小高い岬をなしており、突端に牧ノ鼻の地名もあるが宅地造成や埋め立てによって、地形的特徴は薄れている。左図は、昭和28年に町制施行10周年を記念し刊行された、『香椎町史』所収の地図で、すでに、香住ヶ丘古墳推定地周辺は区画の整理が進んでいる状況である。

古墳推定地の現況標高は、10.5～11mを測る。推定地点は、北北東に向かって下る細い尾根の上に位置している。

現在は民家が建て込んでおり見通しは悪い。本来は眼下に下唐原の集落、牧の鼻、和白の干潟、博多湾を一望できる、眺望の良好な地点に占地していたと考えられる。

平成18年度 第2回
福岡市文化財保護審議会配布資料



◀ 広義の福岡平野を画する多々良川右岸から和白にかけての平野は狭小である。海岸部は現在よりも丘陵際まで迫っていたと推定されている。

この地域は、名島古墳を初めとする前期古墳が分布しており、九州北部沿岸では形成時期が早く特異な分布状況を示している。

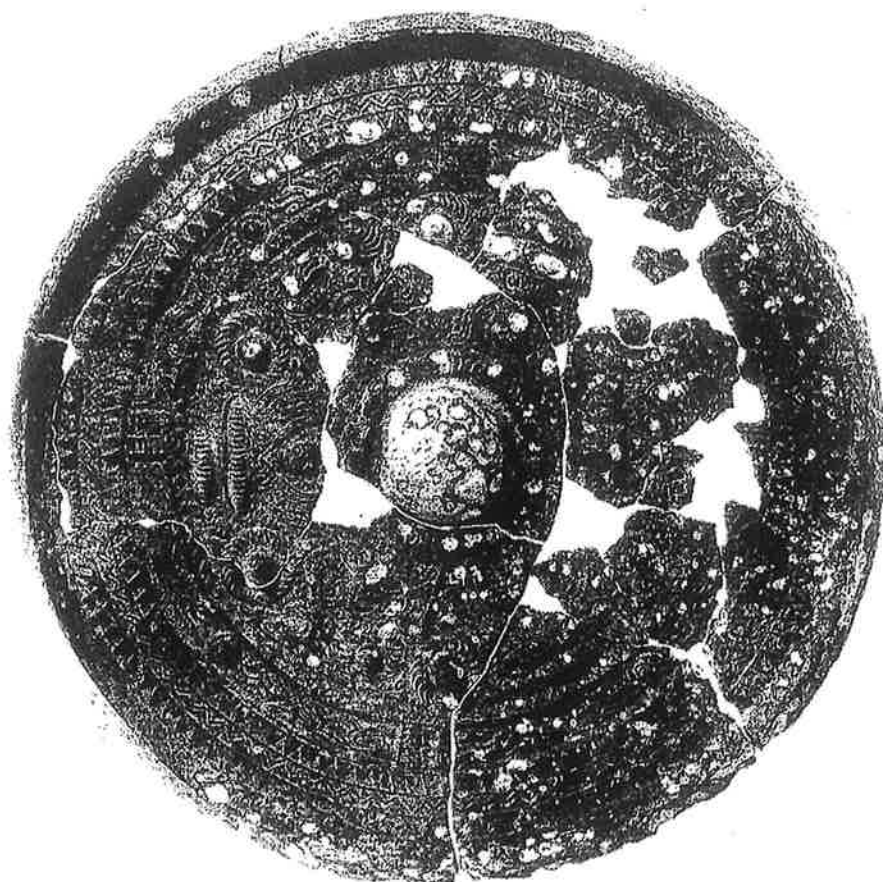
◀ 香住ヶ丘古墳位置図



▲ 香住ヶ丘古墳出土の三角縁神獸鏡



▲名島古墳出土鏡



▲東区天神森古墳出土鏡

光正寺古墳の発掘と整備を終えて

宇美町教育委員会 平ノ内 幸 治

光正寺古墳の位置

光正寺古墳は福岡県糟屋郡宇美町大字宇美字坂本に築造されています。

光正寺古墳の発掘

光正寺古墳の発掘調査は、平成8年度から10年度までの3カ年間で行いました。その間の調査の経過を説明いたします。

平成8年度は後円部中心から東、南、西、北の調査区を設定し、後円頂部から墳丘斜面の調査を実施しました。この調査で第1・2調査区で葺石が残っていることを確認しました。

平成9年度は前方部とクビレ部の確認調査で、南西側斜面の保存状態は比較的良好で、これに対して北側の保存状態は良好でないが、墳丘裾部のラインは確認できました。

平成10年度は後円部で主体部の調査を実施しました。第1主体部は数回の盗掘を受けており当初の施設としては川原石の集積状況を確認しました。第2主体部の調査では第1主体部との切り合いを確認し、水銀朱の入っていた土器が出土しています。

第3・4主体部は第1主体部の南側で確認しました。第3主体部は溝状遺構の確認にとどめています。第4主体部は第3主体部の範囲確認作業の課程で発見したものです。

第5主体部は平成11年度の整備事業開始直前に行った三角点の移設作業で確認したものです。

埋葬施設の特徴

埋葬施設は、後円部中央に第1主体（築造当初の墓で大型の箱式石棺）を埋置しています。第1主体部は、大型の箱式石棺を川原石で囲んでいます。規模は長軸で約6m、幅約4mで箱式石棺の石材は、能古島の玄武岩や月隈丘陵の緑色片岩、若杉山の滑石などが使用されています。

第2主体部は第1主体部の北東側に箱式石棺が、築かれていました。石棺は昭和40年代には露出していたため、その後破壊されていました。今回の発掘調査で石棺の石材には地元の砂岩を使用されていることが解りました。

第3主体部（割竹形木棺）は第1主体の南側で棺の腐食によって陥没した溝状遺構と埋め土の上に置かれていた土師器棺が出土しています。

第4主体部（土器棺）は第3主体部東南角に掘り

方を切り合った状態で出土しました。この時期の土器棺としては最大級の大きさであります。

第5主体（箱式石棺）は第1主体部西側で確認しました。

このように後円部墳頂部に5基の埋葬施設を有するものは福岡県下では初めての発見ではないかと思えます。

主体部は第1から第4主体部が、主軸を東西方向に整然と並べて築かれ、頭位は西に向けていたと推定されます。これらに対し、第5主体部は南北方向に主軸を向けて造られています。このことと上述の切り合い関係から主体部の築造順位は、概ね第1・2・3・4・5主体部の順に造られたようです。

墳丘施設の特徴

墳丘規模は全長約53m、後円部径約33m、後円部高7.9m、前方部長20m、前方部高3.3mで前方部2段築成、後円部3段築成の糟屋郡内最大の前方後円墳です（別紙図参照）。

古墳は、標高46m前後の東西方向に延びる、細い丘陵上に築かれています。古墳の整形に当たっては、地山整形により1段目と2段目のテラスが造り出されています。

2段目のテラスより上位は盛り土を行っています。盛り土は版築で行われています。

墳丘周囲には2段目以上で葺石が施されています。

古墳の特徴

1、古墳の特徴としては、後円部と前方部の高低差が明瞭であること。

2、後円部に五つの埋葬施設を有すること。

3、築造年代が古く「魏志倭人伝」の時代に近いこと。

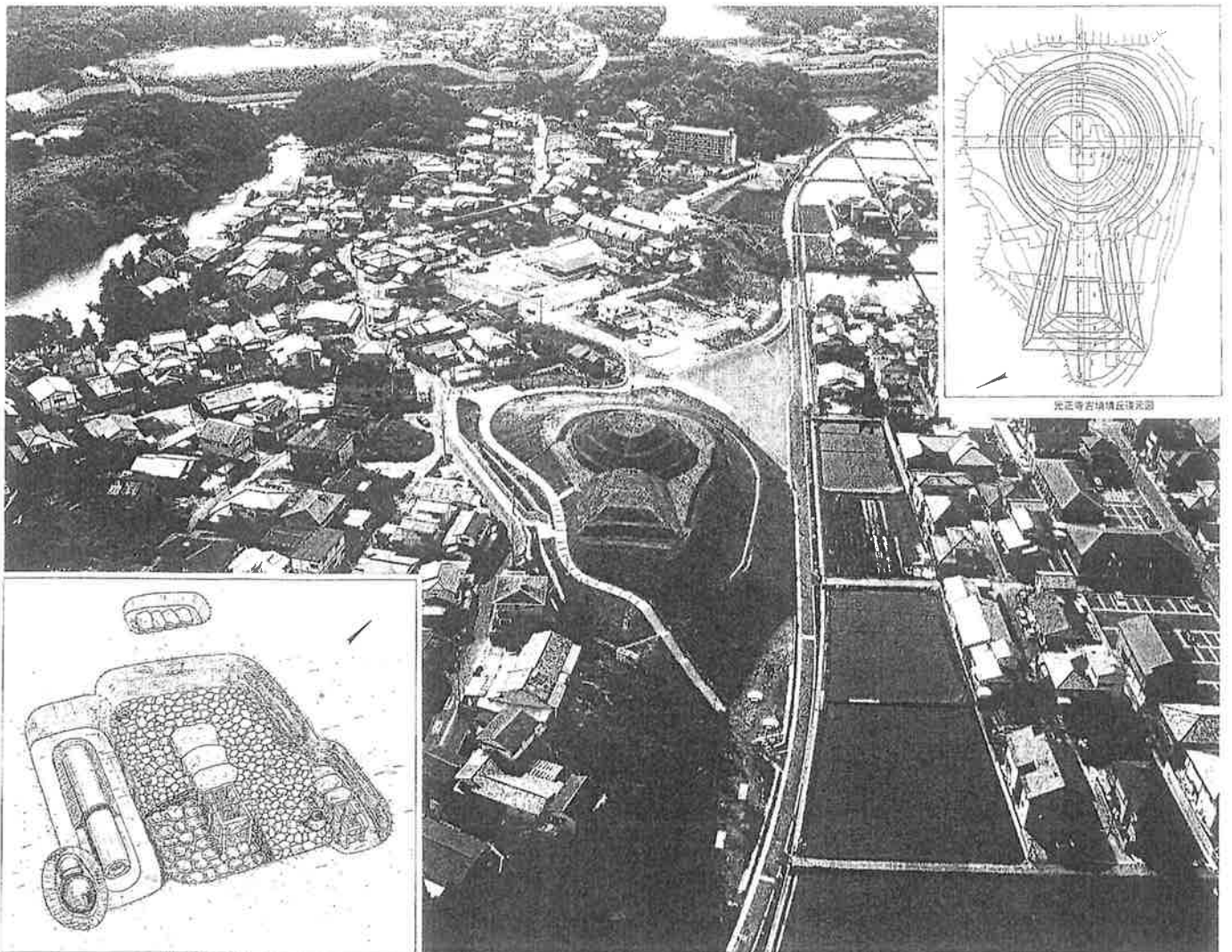
墳丘は盛り土で保護し築造当初の形状を再現しています。しかし、本来は墳丘に葺石が敷かれていましたが、葺石部分は復元せずに、古墳周辺の芝生の広場と一体として利用できるように整備しました。

本来の墳丘の形状、主体部の形状についてはガイダンス広場に1/5の大きさの古墳を今年度事業で復元します。

宇美町・宇美町教育委員会、2000『シンポジウム 不弔爾國と倭人伝の國』



糟屋郡の位置と主要遺跡



光正寺古墳墳丘断面図

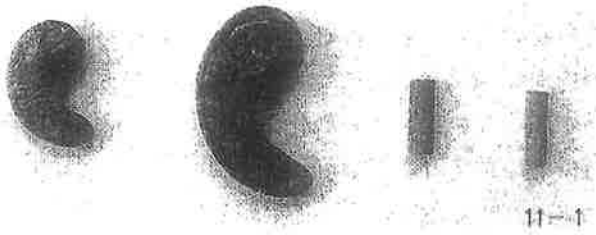
光正寺古墳断面図(イメージ)

光正寺古墳

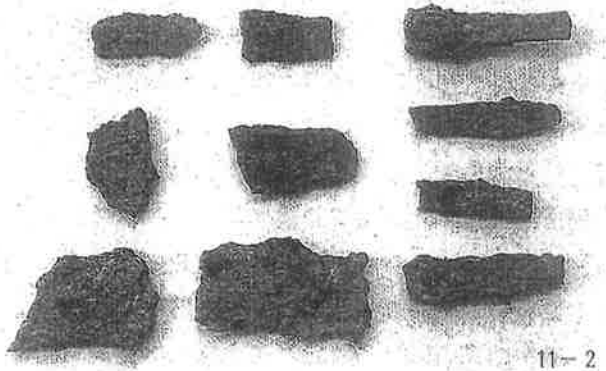
各地域の出土遺物

糟屋地域

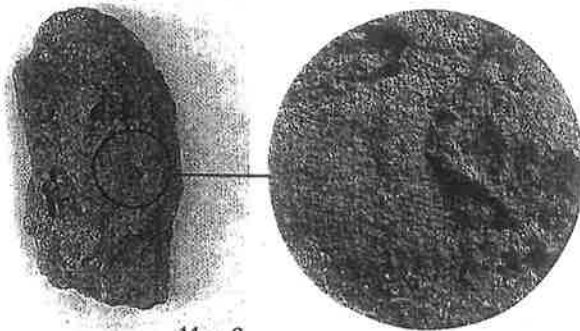
光正寺古墳



11-1



11-2



11-3

11-1 勾玉（長さ1.9cm・28cm）・管玉（長さ1.1cm）

11-2 鉄器（鉄剣他）

11-3 繊維痕



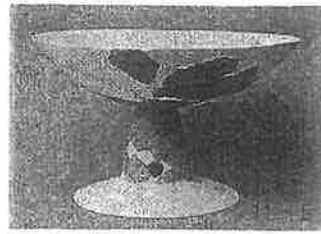
11-4

11-4
第1主体部土師器甕

口径32.2cm

器高40.5cm

胴部最大径37.5cm



11-5 高杯

口径20.2cm（復元値）

残存高11.8cm



11-6

11-6

第4主体部上棺壺

残存高30.8cm

胴部最大径33.8cm



11-7

11-7

第4主体部下棺二重口縁壺

口径44.9cm（復元値）

器高101.5cm

胴部最大径78.5cm

（復元値）

古墳時代前期

宇美町大字坂本

宇美町教育委員会



12

12 銅戈溶范

（国指定重要文化財）

現存長50.1cm

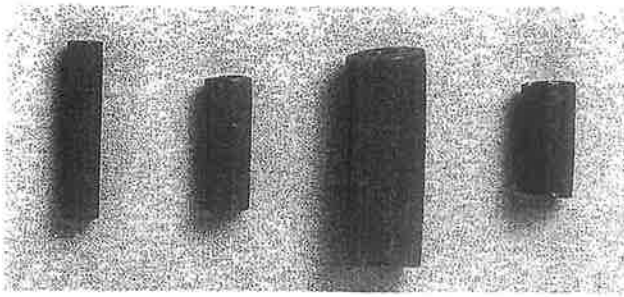
弥生時代後期

福岡市東区大字多

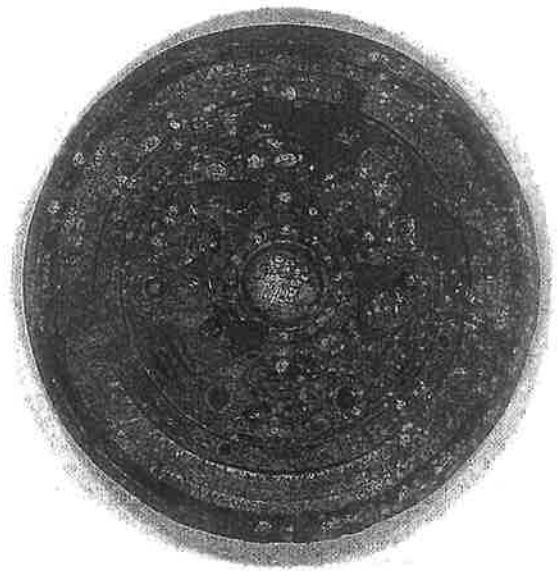
田羅

多田羅大牟田遺跡

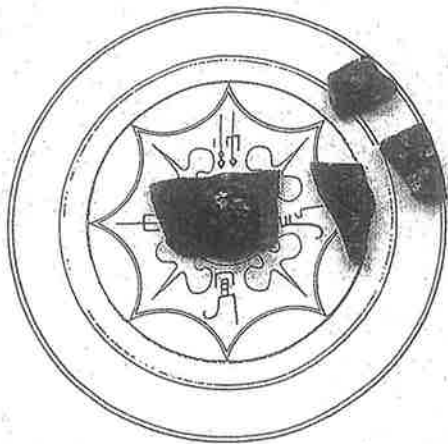
福岡県教育委員会



13 管玉 長さ1.4~2.8cm
 弥生時代終末~古墳時代前期 志免町大字別府
 龜山墳丘墓 志免町教育委員会



16-1



14 内行花文鏡 復元径13.6cm 弥生時代終末
 粕屋町大字大隈 大隈(平塚)墳丘墓
 九州大学考古学研究室



16-2

16-1 三角縁天王日月三神三獸鏡 径22.6cm

16-2 盤龍鏡 径9.9cm

古墳時代前期

福岡市東区蒲田 蒲田天神森古墳

福岡市博物館



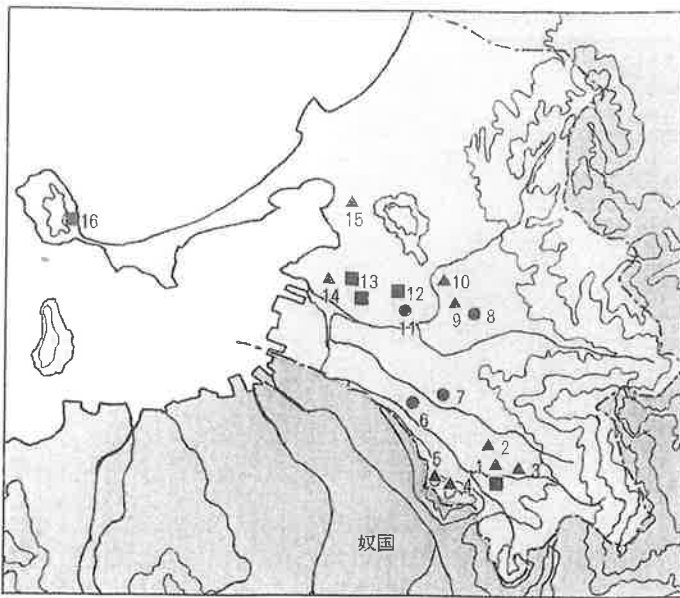
15 三角縁神獸鏡 復元径21.8cm
 古墳時代前期 福岡市東区名島 名島古墳
 福岡市博物館



17 内行花文鏡 径11.6cm 古墳時代中期
 宇美町大字宇美 神領2号墳 宇美町教育委員会

大いなる塚 首長墓からみた邪馬台国時代の糟屋

糟屋地方の弥生時代後期～
古墳前期の主な首長墓の分布
(光正寺古墳展図録を一部改変)



- 鋳型出土地 ● 弥生墳丘墓 ▲ 前期古墳
1. 光正寺古墳
 2. 七夕池古墳
 3. 神領・浦尻古墳群
 4. 松ノ尾古墳群
 5. 萱葉古墳群
 6. 亀山墳丘墓
 7. 酒殿墳丘墓
 8. 上大隈平塚墳丘墓
 9. 部木古墳群
 10. 浦田・天神森古墳
 11. 名子道2号墳
 12. 八田銅剣鋳型出土地
 13. 大牟田銅戈・銅釧鋳型出土地
 14. 名島古墳
 15. 香住ヶ丘古墳
 16. 志賀島銅剣鋳型出土地



上大隈平塚墳丘墓の大型箱式石棺(粕屋町)



亀山墳丘墓の大型箱式石棺(志免町)



内行花文鏡図
(上大隈平塚墳丘墓出土 径13.6cm)

「不弥国」の有力候補地糟屋

「倭人伝」で奴国に続いて登場するのが不弥国である。「東行不弥国に至る百里」と記されているだけで場所を特定する手がかりは少ないが、その有力候補にあげられるのが糟屋地方である。

近年、弥生時代後期～古墳時代前期の首長墓が相次いで発見・調査されており、当時、この地にも王を頂点とする国が成立していたことを窺わせ、注目を集めている。

弥生時代後期の首長墓

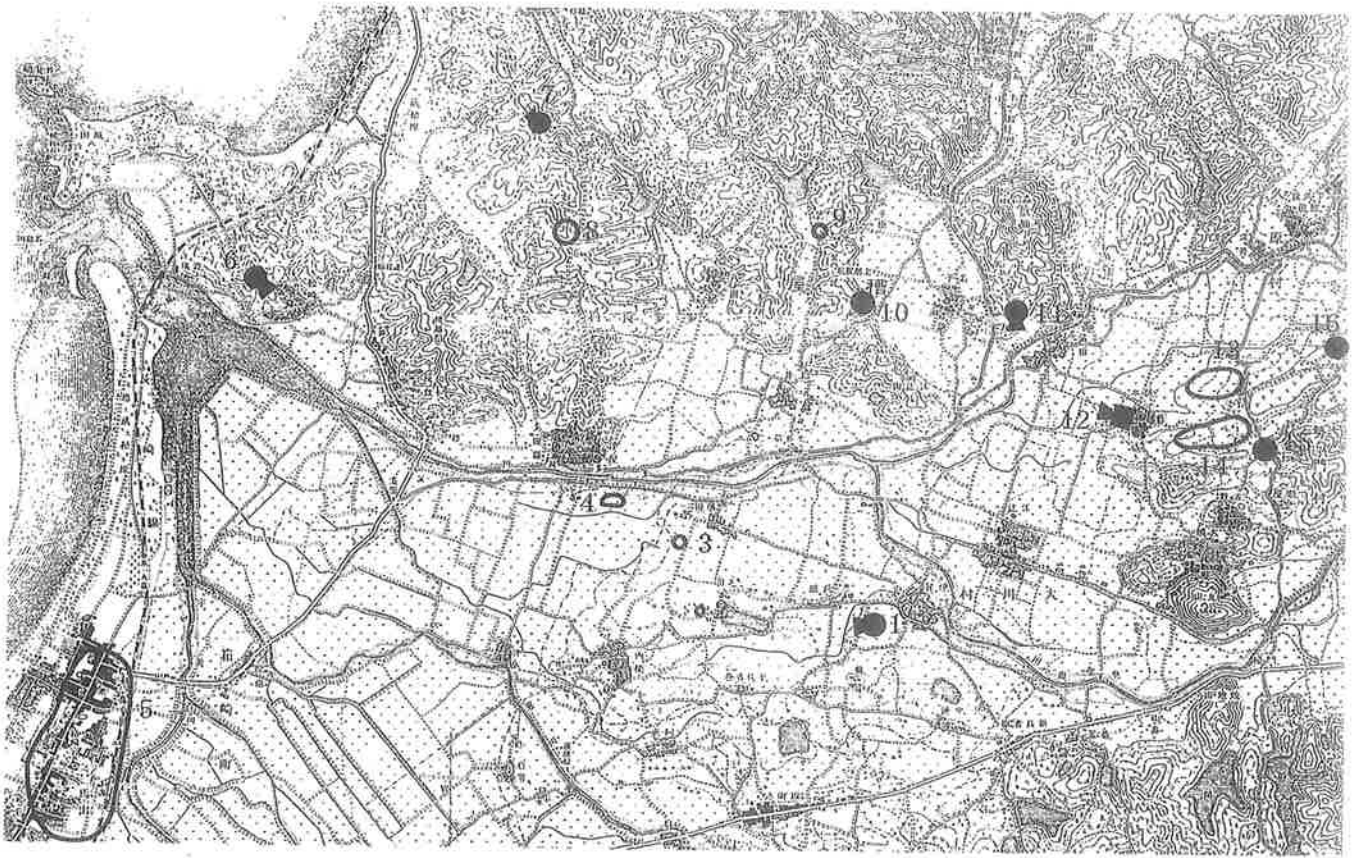
弥生時代の後期後半～終末期にかけての墳墓として注目されるのが、上大隈平塚墳丘墓、酒殿墳丘墓(粕屋町)、亀山墳丘墓(志免町)である。

亀山墳丘墓の内法長二・一mを筆頭に二mに届きそうな大型の箱式石棺が主体部に用いられているところに共通性がみられる。

それぞれの墳墓が単独で立地したり、あるいは近隣の同種主体部とは隔絶した規模のものであったり、一見してその存在が他を圧倒する階層的格差の象徴であることを示している。

また、副葬品として内行花文鏡(平塚墳丘墓)、小形仿製鏡、獸首鏡、管玉(酒殿墳丘墓)などが出土していることも見逃せない。また、亀山墳丘墓では棺床に水銀朱が敷かれていた。

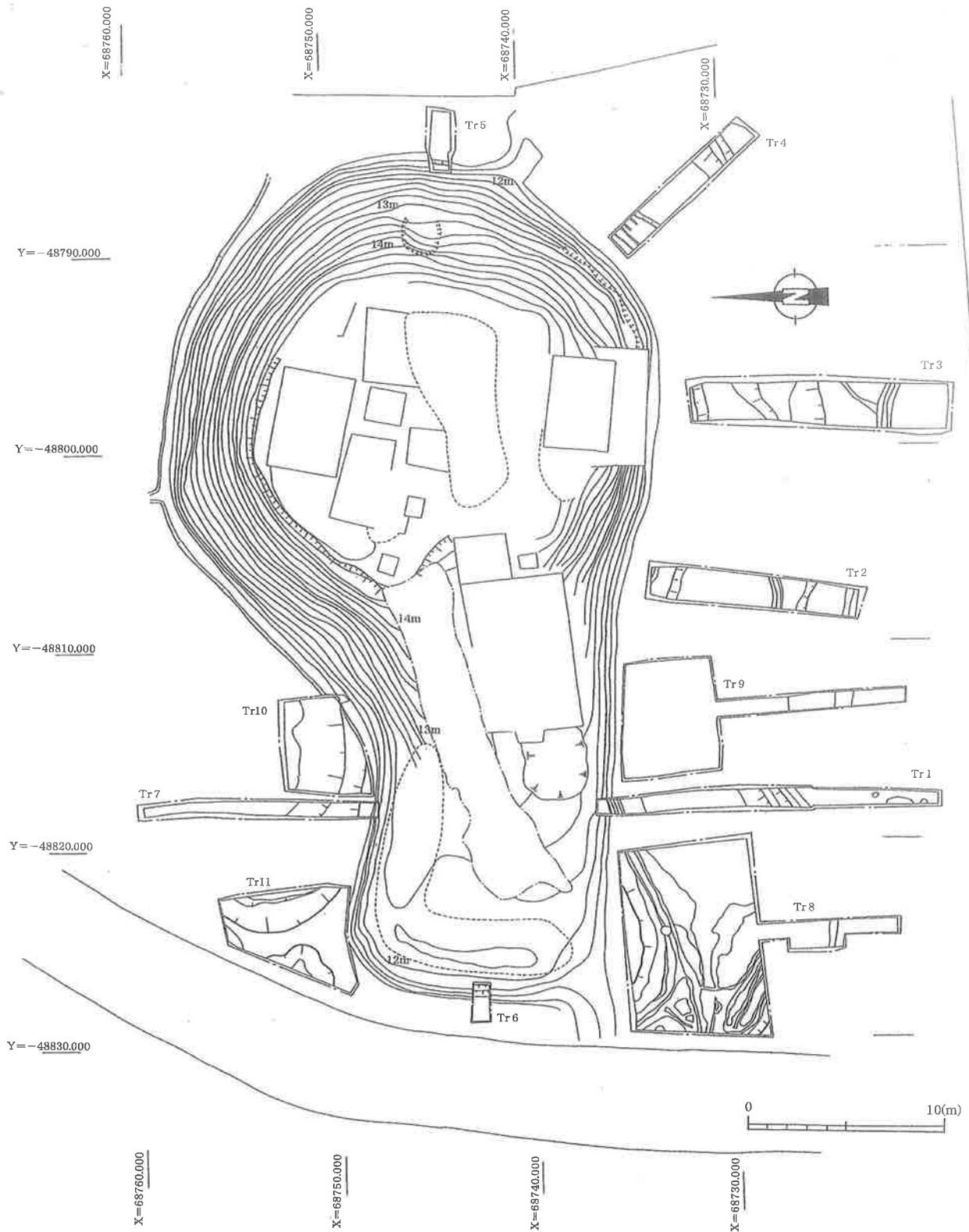
当地では、後期の墳墓から副葬品がほとんど発見されていないことを勘案すれば、大型箱式石棺の被葬者に階層的な圧倒的優位性があることは間違いない。これらの墳墓の詳細な時期については明らかでないものの、その登場は、弥生時代終末期における当地の首長の誕生を予見させる。



戸原王塚古墳位置図 (1/40,000)

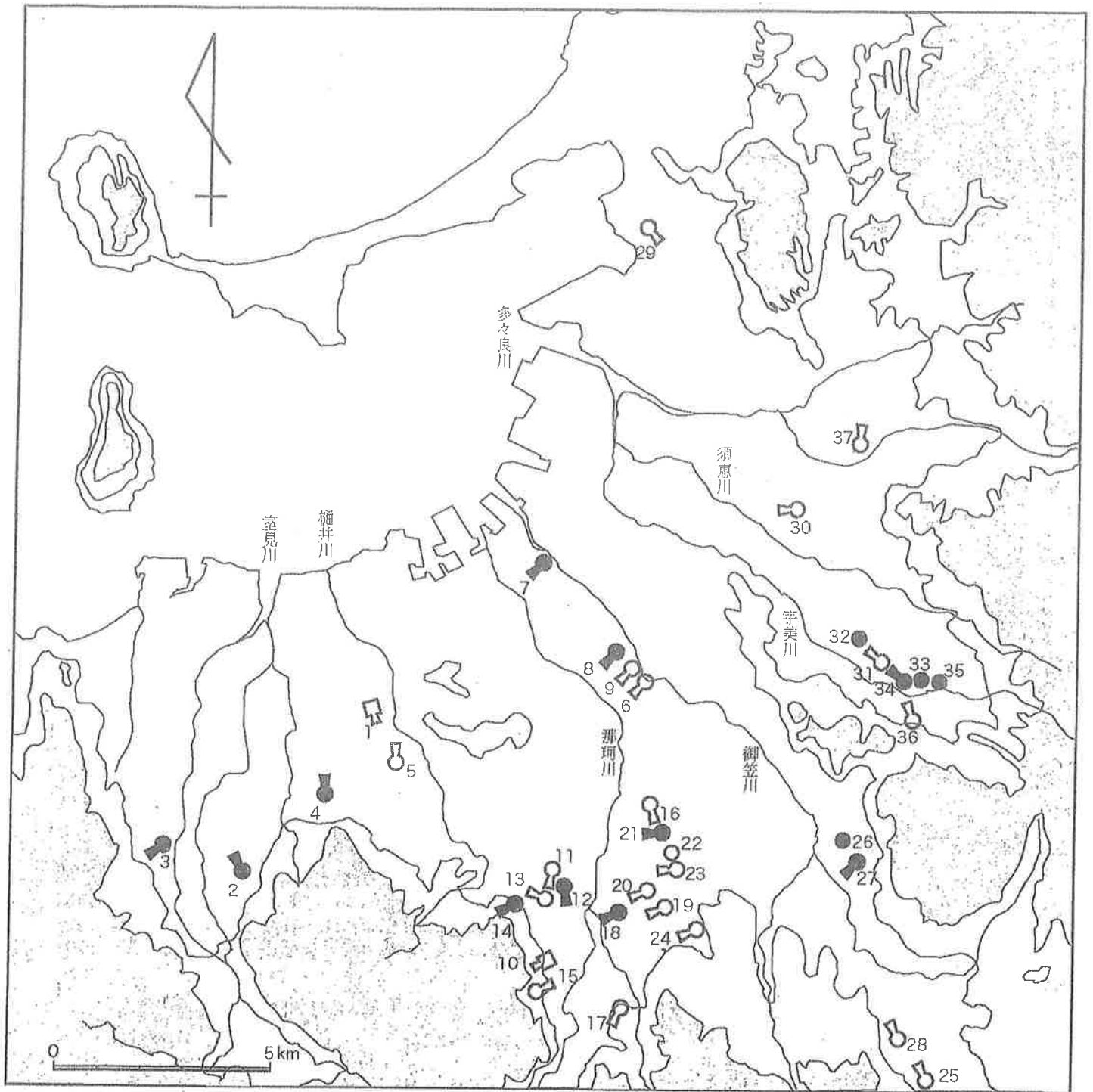
1. 戸原王塚古墳 2. 内橋登り上り遺跡 3. 戸原鹿田遺跡 4. 多々良込田遺跡 5. 箱崎遺跡 6. 名島1号墳
 7. 舞松原古墳 8. 多々良大牟田遺跡 9. 土井遺跡 10. 名子道2号墳 11. 蒲田天神森古墳 12. 部木1号墳
 13. 蒲田水ヶ元遺跡 14. 蒲田部木原遺跡 15. 大隈石棺 [平塚古墳] 16. 原石棺群 (明治34年の地形図)





戸原王塚古墳測量図 (1/300)

粕屋町教育委員会, 2006 『戸原王塚古墳』 『粕屋町文化財調査報告書』 第23集

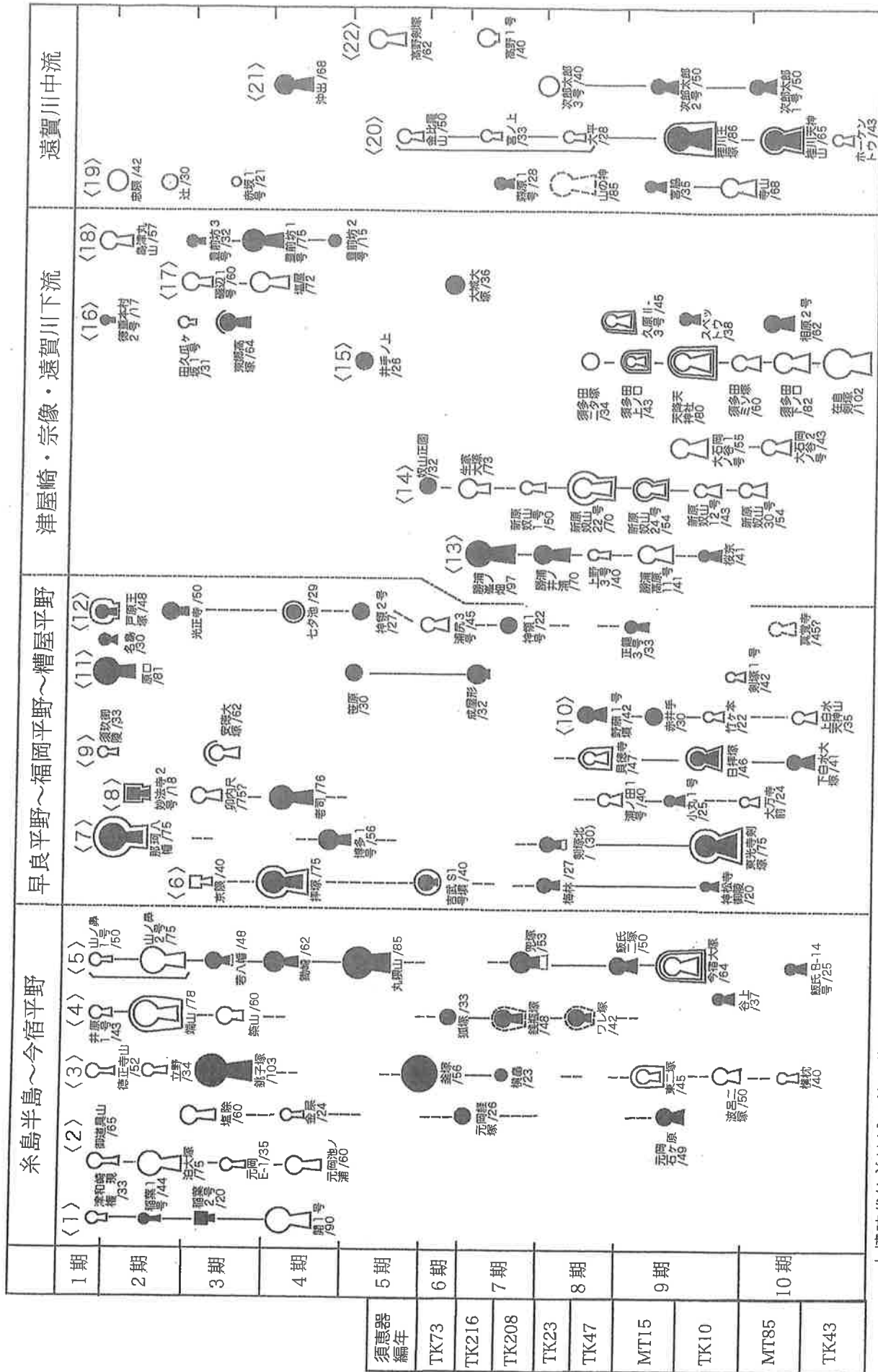


1. 京隈 2. 拝塚 3. 吉武S1号 4. 梅林 5. 神松寺御陵 6. 那珂八幡 7. 博多1号 8. 剣塚北 9. 東光寺剣塚 10. 妙法寺2号 11. 卯内尺 12. 老司 13. 浦ノ田1号 14. 小丸1号 15. 大万寺前 16. 須玖御陵 17. 安德大塚 18. 貝徳寺 19. 日拝塚 20. 下白水大塚 21. 野藤1号墳 22. 赤井手 23. 竹ヶ本 24. 上白水天神山 25. 原口 26. 世原 27. 成屋形 28. 剣塚1号 29. 名島 30. 戸原王塚 31. 光正寺 32. 七夕池 33. 神領2号 34. 浦尻3号 35. 神領1号 36. 正籠3号 37. 真覚寺

早良平野・福岡平野・糟屋平野の首長墓の分布（黒塗りは中期古墳）

重藤輝行・宮田浩之，2007「地域編年考察「筑前・筑後」」

『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会



古墳時代筑前地域の首長墓系列

(<) 内番号は分布地図に対応、黒塗りは時期を限定できるもの、灰色は時期が前後する可能性があるもの、白抜きは時期決定の根拠の弱いもの。〔は前後関係不詳の一群、-は連続的な関係を示す。古墳名の後の数字は墳裾を基準とした全長ないし直径であり、() を付した数字は残存値である〕

古墳時代筑前地域の首長墓系列